から水が濁れるなどという心配はないというが、それはほんとうか。濁水期に入っても取水される水量がかわらないとすれば、霞ケ浦の水は極度に減って湖面が露出したりすることになるだろう。汚濁がいっそうひどくなることはいうまでもない。

さらに問題になるのは、常陸川逆水門の完全操作によって貯水量を一一億トンに増やそうとする計画である。これが行なわれればいまでさえ水泳もできないほど汚れきっている湖水は、いよいよ汚濁が進行し、科学者達が警告しているように数年を経ずして湖面から悪臭が立ちのぼるようになる。そして、農民は農業用水を、漁民は生活の場を、一般住民は飲用水を奪われることになり、霞ケ浦は文字どおり〝死の湖〟になりかねない。

いま、私の手もとにある国（経済企画庁、農林省、水資源開発公団など）や県の「霞ケ浦総合開発」の事業実施計画書をみてもわかることだが、霞ケ浦の水を貯め、それを利用することだけが先行していて、水質や環境保全に関する具体的実施計画は皆無に等しいという事実である。したがって住民サイドからこの計画をみると、国や県は、工業用水を収奪するためにやみくもに「水ガメ」化計画をいそいでいるとしかみえない。利水計画によれば、農業用水とか上水道用水にも大いに利用されると述べているが、水質保全がいっこうに考慮されない「水ガメ」化の水は、泥沼の水と同じことだから、工業用水以外には利用不可能となることは目にみえている。

このように「霞ケ浦総合開発」による「水ガメ」化とは、工業用水優先の計画であって、断じて住民のためのものではない。私たちは住民無視のこの無謀な「水ガメ」化をゆるしてはなるまい。

（土浦市民の会会長）